長野市立博物館 Nagano City Museum

博物館だより

第96号

小泉癸巳男 「諏訪湖の不二」（多色木版　昭和18年制作）

小特集　年末年始

小泉癸巳男直筆絵はがき

伊勢町八田家の年末年始　－昭和６年の日記から－

資料紹介 小泉癸巳男の直筆絵はがき

信州新町美術館の主要な所蔵作家の一人に版画家・小泉癸巳男（明治26年～昭和20年／1893～1945）がいます。平成27年は、小泉癸巳男没後70年の節目年でした。

そこで、ご紹介するのが、貴重な直筆絵はがきの数々です。この絵はがきは、小泉と生涯にわたり親交のあった水彩画家・赤城泰舒（やすのぶ）のご遺族より、昭和43年（1968）当館へ寄贈されたもので、当初はスクラップ帳に張り込まれていたものです。作品ではなく絵はがきか･･･と思う方もいらっしゃるかもしれませんが、小泉の直筆はがきは作品以上に大変珍しい興味深い資料なのです。なぜなら、これまで小泉の直筆資料（日記や書簡類など）は、ほとんど発見されてこなかったからです。それが当館に寄贈されていたのです。実は、これらはスクラップ帳にしっかりと糊付されていたため、小泉のものと確認するには、数年にわたる修復期間を要しました。そして、ようやく24枚の絵はがきが閲覧できるようになりました。

小泉癸巳男は旧幕臣の書家・小泉松慵の第五子として静岡市下桶屋町に生まれました。小さい頃から図画が得意だったこともあり、明治末に画家を目指し上京、日本水彩画会研究所に入り水彩画を学びました。その後、彫師・堀越貫一の木版工房に入り彫版技術を修得します。そこでの経験を活かし、小泉は版画家への道を歩み始めます。そして大正8年（1919）に、版画家・山本鼎らが設立した日本創作版画協会会員に推挙されました。「創作版画」とは、あまり耳慣れない言葉かもしれませんが、それは明治末頃に誕生した版による新しい芸術表現のことです。小泉もまた、その創作版画の普及と振興に尽力した版画家です。代表作には、昭和初期の東京風景を情緒的に描いた風景版画『昭和大東京百図絵』があります。

当館所蔵の直筆絵はがき24枚は、小泉癸巳男が赤城泰舒に宛て送ったものです。水彩のもの、版画で作られたものなどバラエティーに富んだ絵はがきがあります。ここでは木版画による4枚の年賀状をご紹介します。[1] は大正8年（1919）、干支は「未」です。[2] は大正9年（1920）、女の子が手鞠をついている可愛らしい一枚です。[3] は昭和5年（1930）、干支は「午」です。烏帽子をかぶった男が白い新馬を引く絵です。[4] は昭和6年（1931）、上野東照宮附近の雪景を描いた一枚です。雪の中、洋傘の男性と和傘をさす和服姿の女性が連れ添い境内に入って行きます。初詣でしょうか、小泉が得意とする情緒あふれる風景版画です。

当館では、これらの資料を展示する「小泉癸巳男の絵はがき展」（3月5日～4月10日）を開催します。また現在は、「小泉癸巳男の創作版画展」（2月28日まで）を開催中で、140点に及ぶ版画作品を一堂にご覧になれます。その一例として本誌巻頭でとりあげた作品は、昭和18年に制作された「諏訪湖の不二」です。諏訪湖から遠く富士山を望む一景で、遺作『聖峰富岳三十六景』の内の一作品です。

没後70年、この機会に小泉癸巳男の作品、資料の数々を是非ご覧下さい。

（信州新町美術館　　前澤朋美）

〔1〕大正8(1919)年

〔2〕大正9(1920)年

〔3〕昭和5(1930)年

〔4〕昭和6(1931)年

伊勢町八田家の年末年始
― 昭和6年の日記から ―

はじめに

現在開催中（平成27年12月18日～平成28年2月21日）の企画展で取り上げている伊勢町八田家には、8代当主の彦次郎が記した日記が残されています。この日記からは、明治時代から昭和時代中頃の生活をみることができます。今回は、その中から昭和初期の年末年始の様子をご紹介したいと思います。

伊勢町八田家

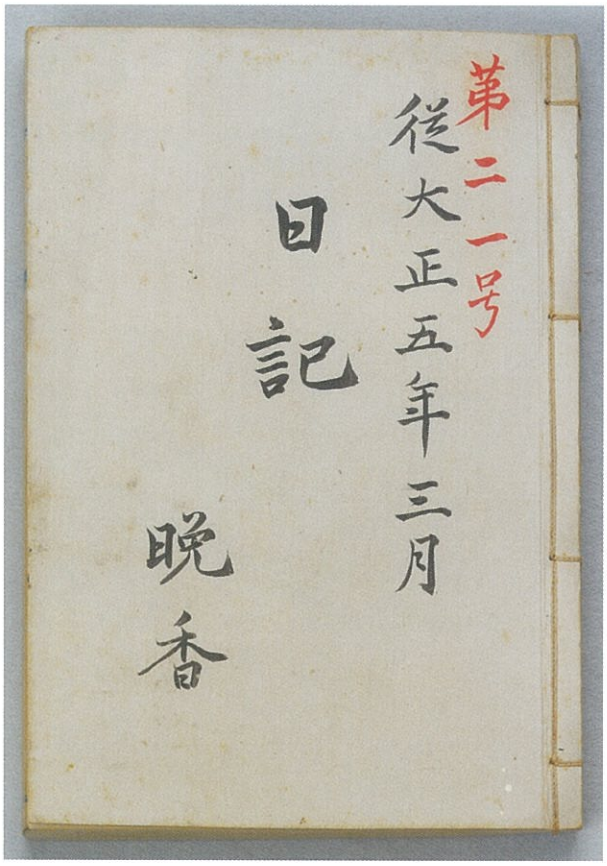
伊勢町八田家は、かつて松代藩の御用商人を務めていました。松代の伊勢町にあることから、伊勢町八田家と呼ばれていました。本家にあたる家は木町八田家と呼ばれ、区別されてきましたが、ここでは伊勢町八田家を、以後「八田家」とします。

八田家は、江戸時代には呉服店、酒造店、質屋などを多角的に経営していましたが、昭和時代初期には、金物店と呉服店を営んでいました。呉服店は、昭和7年（1932）に閉店しましたが、この時不要になった帳場道具をはじめとし、呉服店と金物店に関する近代の資料が、当館に寄贈されています。

また、松代町出身の佐久間象山の遺品を多く所蔵しています。今回の展示では象山関係の品も展示していますが、今回取り上げる日記にも、象山の書簡を整理している様子や、象山の遺品を見るために八田家を訪れた人々の様子が書かれています。

日　記

8代彦次郎は、長男が生まれてから自身の晩年まで、毎日日記を記していました（写真



（写真1）
「日記　晩香」（個人蔵）
8代彦次郎の日記。
「晩香」とは、彦次郎の別称。

1)。日記は全71冊に及び、明治33年(1900)から昭和28年（1953）までの八田家の様子をみることができます。記述は非常に簡素ですが、その日に彦次郎が行ったことや人の出入りが記録されています。中には買い物や、家の行事の記録も見られます。

今回取り上げるのは、昭和6年（1931）の日記です。昭和6年は、長年にわたって八田家で経営されてきた呉服店の営業を、通年で行った最後の年でした。この頃に昭和恐慌の煽りを受けて営業不振に陥ったため、昭和7年（1932）に閉じています。また、彦次郎の妻が手術を受けた年でもあり、彦次郎にとっては激動の年だったといえます。この年の年末年始の様子は、どのようなものだったのでしょうか。

年　末

12月の日記には、年賀状を送り、餅つきをするなど、年末らしい様子が記録されています。

12月23日には、「午前葉書年賀状百四十七枚ヲ郵便局へ差出ス」とあります。

12月28日には毎年餅つきを行っています。日記には、「例年ノ通リ茶之間ニテ今朝早クヨリ餅搗ヲナス手傳明治郎きぬ當番大助」とあります。このような、「例年の通りに餅つきをする」という旨の記録は、ほぼ毎年、12月28日に書かれています。

餅つきは末広がりの「八」がつく28日に行う家が多いと言われます。八田家の餅つきの日時も一般的な慣習に添ったものということ

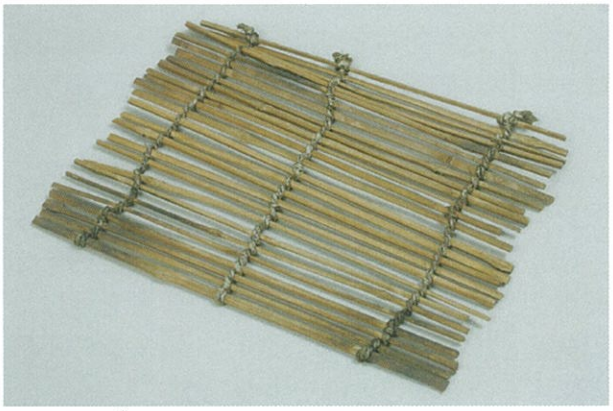
(写真2)八田家で使われていた餅つき用の杵(当館蔵)

が、この記述からわかります。餅つきが行われる場所については、「茶之間」とされています。「チャノマ」は、一般的には炉があり、食事をとったりする部屋のことをいいますが、八田家の史料にでてくる「茶之間」は、それに限らず、家政機関（店ではなく家として行うこと）も指します。また、八田家では、餅つきや味噌の仕込みで手伝いを数人呼んでいたようです。これは、餅や味噌を多く用意しなければならなかったためです。年末ではありませんが、日記には、この年の味噌の仕込みについても書かれています。そこに、手伝い人が、手伝いを承諾しておきながら、当日来なかったことが書かれています。これに対し、彦次郎は「甚不都合ノ奴ナリ」としています。人に対する意見や思った事をあまり記述しない彦次郎が、このように書くということから、味噌の仕込みや餅つきが人手の必要な一大行事だったと想像することができます。

餅つきには、大きな臼と杵を使用しました。博物館には大小二種類の杵が寄贈されています（写真２）。

餅つきで使うもち米は、前の晩から蒸し始めます。別の年の日記には、人が集まってもち米を蒸したことが記録されています。もち米を蒸すときには、蒸籠を使っていました。湯釜の上に小さい穴が開いた板を載せ、その上に蒸籠を置き、中に竹簀（写真３）と布を敷き、もち米を蒸します。多くの餅を搗いていたため、多くのもち米を蒸す必要があったのでしょう。八田家の蒸籠は、五段の重ね蒸籠でした（写真４）。

彦次郎の日記は、基本的に出来事を時系列にそって箇条書きにする形をとっています。



（写真３）竹簀（当館蔵）

（写真４）
八田家で使われていた蒸籠
（当館蔵）

そのため、自身の感想などはあまり記されていませんが、年末には、その年を振り返った感想が述べられています。

昭和６年12月31日には、次のようにあります。

「連年ノ財界不振ニテ一般生活ノ脅威ヲ受ク各地製糸家ノ如キ営業維持不能ニ陥リ工女賃金ノ不払等続出シ当地六文銭工場モ工女ノ賃金ハ支拂ヒタル様ナレドモ近頃聞ク處ニ依レバ従来ノ預金及繭代等三箇年支拂停止ノ発表ヲナシタル由ナリ本月内閣ノ交迭ニ因リ金輸出再禁ノ為メ物價高騰シ益々人氣ヲ沈衰セシメタリ随テ角店金物店等モ売上高大ニ減退シ歳暮市ノ如キ市中各店競テ種々ナル■趣向ヲ試ミタレドモ購買力欠如ノ為メ何等反響ヲ見ズ又掛取ノ結果モ甚不良ナリ

然レドモ家内店勝手ニ至ルマデ幸ニ健康ヲ保チ年越ヲナス」

「角店」とは、呉服店の通称です。この年の呉服店や金物店が、昭和恐慌の影響を受けていたことが分かります。特に、製糸業の不振の影響を強く感じていたようです。

年　始　－年賀状・初売り

年末につづき、年始の記録をみてみましょう。その記録は簡素で、店のことが主に書かれています。

八田家では、年始に必ず祝神社などに参拝をしていたようです。昭和６年１月１日の日記には、まず、「朝祝神社及鎮守様へ参詣ニ行ク」とあります。祝神社の氏子町は広く、伊勢町も含まれているため、八田家は祝神社の氏子でした。

また、１月１日には年賀状の交換先を記録しています。「左ノ通リ葉書年賀状を発ス」とあり、発送先が挙げられています。呉服屋や金物屋に出入りした人に送っているようで、送り先は全国各地に及んでいます。

１月２日は、八田家の経営する店の初売りです。日記には、「本日八例年ノ通リ角店金物店トモ賣初ヲナス」とあります。ただ、この年の初売りは、人で賑わいながらも売り上げはあまり上がらなかったようです。ここにも、昭和恐慌の影響が見られます。

おわりに

以上、八田家の昭和６年の年末年始の様子を、主に８代彦次郎の日記からみてきました。この日記からは、当時呉服店と金物店を経営していた八田家らしく、年賀状を大量に出していた様子や初売りの様子が分かります。昭和恐慌の影響も随所に見られ、当時の呉服店経営の難しさが伝わってきます。

また、収蔵資料との関連がみられるということは、この日記の重要な点と思われます。特に、昭和時代に入った頃までの記録は、貴重なものです。この頃に使われていたものについては、当時実際に中心となって家を運営していた人から話を聞くことは難しく、記録類から当時の様子を検討する必要がでてきているためです。今回みたのは、昭和６年の年末年始という限られた期間でしたが、今後より広くみることで、長野市を代表する商家だった八田家のくらしや生活道具について、探求することができればと思います。なお、八田家の所蔵品については、展示とは別に図録を作成します。展示とあわせてそちらもご覧ください。

（小森明里）

博物館だより　第96号
発行日2015年12月27日

長野市立博物館
〒381-2212 長野市小島田町1414
TEL：026(284)9011
http://www.city.nagano.nagano.jp/museum

戸隠地質化石博物館
〒381-4104 長野市戸隠栃原3400
TEL:026(252)2228

鬼無里ふるさと資料館
〒381-4301 長野市鬼無里1659
TEL:026(256)3270

信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館
〒381-2404 長野市信州新町上条88-3
TEL:026(262)3500

ミュゼ蔵
〒381-2405 長野市信州新町37-1
TEL:026(262)2500